

国語科より

【3学期古文特別講座（新高3）】

1. ご用意いただくものと配付するもの

① 予め用意して **Gnoble** の授業に持参すべきもの

プrint(お帰り問題)を整理・保管するためのもの

: ノート(A4サイズが便利)・バインダー・クリアブックなど

筆記具: 鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、ペン、マーカーなど、お好みのもの

授業の板書をそのままの色で写すためには、蛍光ペン(黄色)、ピンク・オレンジ・青・緑のペンが必要ですが、全てを合わせる必要はありません。

辞書: 古語辞典(電子辞書やスマートフォンのアプリ・サイトの利用も可)

授業中には使用しません。宿題実施の補助としてのみ必要です。

② **Gnoble** の授業内で配付されるもの

通常授業テキスト: 01-1 の授業内で配付

小テスト: 01-2~02-3 の授業冒頭で配付・実施

お帰り全訳演習Print: 授業最後の演習、翌週までの添削、翌週授業での解説で使用

授業定着Print: 授業で扱った長文の現代語訳や文法事項の確認(復習に利用)

古典参考書アドバイス: 02-3 の授業で配付

2. 授業の進み方と日々の取り組み

① 授業の進み方

▼全6回のカリキュラム

第1回 用言の活用・助動詞の基礎確認、読解演習①

第2回 助詞・敬語の基礎確認、読解演習② + 小テスト(復習+古文単語)

第3回 読解演習③ + 小テスト(復習+古文単語)

第4回 読解演習④・⑤ + 小テスト(復習+古文単語)

第5回 読解演習⑥、和歌の修辞法、入試問題①(東大) + 小テスト(復習+古文単語)

第6回 入試問題②(共通テスト対策) + 総まとめテスト + 今後の学習アドバイス

この6回の授業で古文の単語・文法の基礎を固めるとともに、初見の長文を理解する助けとなる古文常識を身に付けていきます。基礎から入試問題演習までを6回で学ぶ集中講座であるため、重要なことは「休まずに授業を受けること」(やむを得ず欠席する場合にも「映像授業」サイトで教材のダウンロード・演習・動画視聴を必ず行うこと)と「毎回の授業を丁寧に復習すること」です。

▼3学期古文特別講座を受ける上での注意点

- 授業では書き込み型の教材を配付していますが、テキストであれば同内容を2回印刷し、プリントであれば2枚配付しています。必ず演習時には1度自力で解いてください(=解説されるのを待たない)。授業を聞きながら、それを自身で添削していきます。解説や関連

知識も周辺にどんどん書き込み、自分専用の濃密な参考書を作り上げましょう。

- 古文単語学習の入口として、まず 100 語の完全定着を目指します。第 2～5 回で各回 25 単語ずつ、最終回で 100 語全体を範囲とした小テストを実施します。語源を調べたり、例文を書き写したりして、理解・納得を伴う形で記憶するようにしてください。
- 第 2 回以降では、前週までの内容(文法・単語)を復習するテストを実施します。「9 割以上取るのが当たり前」という定着度を目指してください。

②日々の取り組み

▼古文の復習

最低限3回確認することを提案します。

①簡単な復習

授業を受けた日の寝る前、次の日など、記憶の新しいうちに、復習用(書き込みなし)のテキスト・プリントを眺めます。「あれっ、この部分は何だったっけ?」と感じた部分に付箋を貼りながら読み返し、書き込み入りのテキスト・プリントの方を見て疑問点を解決します。長文は、1 回音読しておく、単語や文節の区切り目などが意識化されて、より良いでしょう。

②丁寧な復習

まとまった時間が取れるときに、文法の原理や訳の根拠などを丁寧に確認しながら授業しよう教材を見返します。特に長文に関しては、授業時に配付する授業定着プリントも実施しましょう。ゴールは「誰かに授業ができる状態」です。白紙のプリントを見ながら、前から漏れなく説明ができるかどうか、「エア授業」「脳内解説」をしてみましょう。

なお、授業定着プリントについても、自分で解説できる水準での理解を目指してください。分からなければメールや授業前後の時間を利用して、担当に質問するようにしましょう。

③見直し

次回授業の直前に教材を見返し、曖昧な点がないようにして小テストに備えます。

▼学校の授業教材の深い理解

Gnoble の授業で学んだ文法のポイント、古文単語などを踏まえ、学校で扱う長文も「エア授業」「脳内解説」ができるようにしましょう。

▼古文常識の習得

学校で配付される便覧(配付のない人は、『原色シグマ新国語便覧』(文英堂)を買い求めておきましょう)の古文時代の暮らしや文学史などのページを適宜参照し、イメージを持てるようにすることで、初見の長文に強くなります。

(参考資料) 受験科目「国語」の特質と長期的展望の必要性

大学受験の一科目として「国語」を見たとき、注意しなくてはならない点は、大学により求められる力が大いに異なるということです。そもそも、国語が受験科目に存在するかどうかということ自体、大学によって差があります。

たとえば、国立理系志望の生徒の場合ですと、

- 東大……………理系でも二次試験まで必要
- 東工大……………二次試験、国語無し。共通テストでは受験するが、最終合否判定における共通テストの重要性が著しく低い
- 国立医学部…二次試験に国語があるところは東大・京大など限られるが、共通テストで高得点が必要である

というように、志望校によって国語の必要状況に差があることが分かります。

同じように、現代文・古文・漢文という3つの区分に関しても、選択問題・記述問題という形式に関しても、どこまでの学習が必要であるかは大学によって異なっています。私立文系の大学では、学部・学科ごとに出题範囲・形式が違うこともしばしばです。受験技術的な話ばかりするのは我々も好きではありませんが、国語の受験勉強に関しては、志望校が固まり次第、受験科目として国語がどのように必要であるかを調べるのが相当に重要です。配点等を調べると同時に、実際に解かなくて構わないので、早いうちに過去問を見てみることを推奨します。

こうした入試制度に鑑みた上で、グノーブル国語科では、高校生活3年間の国語学習に関して、以下のような学習スケジュールを提案しています。

(中3…古文入門 [冬期講習]・現代文入門 [3学期])

高1…古文 [春期講習からの通年講座、1年間完結]

高2…現代文 [春～12月] (文系、東大・京大志望の理系)

古文 (高1で未履修の者) [春期からの通年講座、1年間 (もしくは春～12月) 完結]

※高1・高2の夏期講習と冬期講習に「漢文」開講 (どこかで1回受講する)、それを踏まえた長文演習講座として新高3 (高2) の1～2月に「3学期漢文特別講座」開講

※新高3 (高2) の1～2月に「3学期古文特別講座」(高1・2で未履修の者向け速習講座) 開講

高3…志望校別の対策 [春期講習から直前講習で完結]

東大国語、難関国語、私大国語、小論文・医学部小論文

※難関国語は京大・一橋大・阪大・東北大・筑波大・お茶の水女子大など、2次試験に記述の国語を課される大学を受験する生徒向けの講座

※私大国語は早稲田大・上智大・明治大・立教大などの文系学部を受験する生徒向けの講座

※4月の入室テストで不合格の生徒は4～7月開講の基礎力強化講座「受験国語基礎」にご案内

※夏期講習と冬期講習に「共通テスト国語」開講

学校で、理科・社会の範囲履修があまり進んでいない高1のうちに、通年で「古文」を受講し、古文の学力を完成させるスケジュールが理想的だと考えています。そうすれば、高2の間に、現代文の実戦演習や理科や社会の勉強に着手する余裕ができ、現役合格の可能性が高まります。

いずれにせよ、高3になって慌てて古文の学習に手を着けるようでは、十分な学習時間を確保しにくく、成績を上げるのもなかなか難しい、という事実はお伝えしなくてはなりません。どのような方法で勉強するにせよ、入試に国語が関わる(関わりそうな)場合は、高2までに古文(漢文を使用する場合は、漢文も)の基礎学力を身に付けることを前提にお考えいただければと存じます。